

■2019年センター倫理本試験分析

69.0% 60.0%

大問	全国 河合塾	講座	問	講座 正答率	正解	自己 解答	配点	長生 現役 正答率	全国 正答率	全国 講座 差	
1 青年と現代	70.3%	67.7%	1	81	3		3	100	86	▲ 5	E
			2	50	4		3	25	43	7	D
			3	100	2		3	100	95	5	E+
			4	100	1		2	75	96	4	E+
			5	69	1		2	100	68	1	M
			6	13	2		3	50	51	▲ 38	D
			7	44	4		3	25	49	▲ 5	D
			8	38	2		3	50	48	▲ 10	D
			9	88	3		3	75	85	3	E
			10	94	3		3	100	82	13	E
2 思想の源流	64.2%	62.4%	11	63	2		3	75	65	▲ 2	M
			12	100	4		3	100	99	1	E+
			13	44	2		2	50	33	11	D+
			14	50	1		3	50	57	▲ 7	M
			15	31	3		3	50	67	▲ 36	M
			16	94	1		3	75	72	22	M
			17	38	3		2	50	69	▲ 31	M
			18	81	4		2	25	44	37	D
			19	94	4		3	100	94	0	E+
3 日本思想	65.7%	48.7%	20	29	5		3	50	42	▲ 13	D
			21	50	3		3	75	75	▲ 25	M
			22	36	2		2	75	75	▲ 39	M
			23	36	4		2	100	53	▲ 17	D
			24	93	1		3	100	96	▲ 3	E+
			25	29	2		3	100	75	▲ 46	M
			26	43	4		2	25	62	▲ 19	M
			27	43	1		3	25	30	13	D+
			28	79	3		3	100	84	▲ 5	E
4 西洋思想	71.6%	56.3%	29	50	2		3	100	85	▲ 35	E
			30	93	4		3	75	81	12	E
			31	50	6		3	75	77	▲ 27	M
			32	21	2		3	75	34	▲ 13	D+
			33	79	4		3	50	79	0	M
			34	36	4		3	75	60	▲ 24	M
			35	71	1		3	100	90	▲ 19	E
			36	50	1		3	50	69	▲ 19	M

倫 理

2019年センター本試験

解答と解説

提出者 14 名

受講者平均

全国平均
長高卒業生平均

62.25 (標準偏差16.25)
67.6(6人受験)

第1問 標準 《家族の多様性をめぐって》

問1 1 正解は③

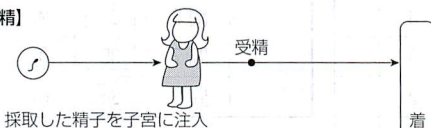
- ①・②不適。青年期は近代以降に出現したものであり、近代以前の多くの社会では、通過儀礼を経て大人として認められた。①は「青年期を経て」、②は「大人として自立するための通過儀礼は必要とされず」という記述が誤り。
- ③適当。ホリングワースが名づけた心理的離乳の説明として正しい。
- ④不適。「子どもと大人のどちらの世界にも帰属しない状態」をドイツのレヴィンは境界人（マージナル=マン）と名づけた。

問2 2 正解は④

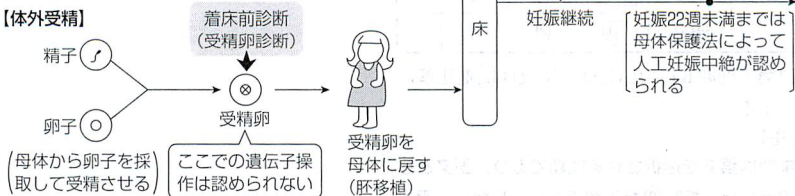
- ①不適。着床前診断とは出生前診断のうちの受精卵診断のことで、「受精卵が胎児に成長した段階」ではなく、体外受精した受精卵を胚移植する前の段階で検査を行うこと。
- ②不適。デザイナー=ベビーをもうけることは日本では法的に認められていない。
- ③不適。「生まれてくる子どもの遺伝上の母親」となるのは、代理出産をした女性ではなく、卵子を提供した女性である。
- ④適当。「第三者の男性が提供した精子を用いて人工授精を行うこと」（非配偶者間人工授精）は可能であるが、この技術によって誕生した子どもの「出自を知る権利」をいかに考慮するべきかなど、問題は多い。

NOTE

【人工授精】



【体外受精】



問3 3 正解は②

- ①不適。「ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合」は、40～59歳の男性では減少している（50%→41%）。

- ② 適当。20～39歳の年代の「ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合」は、男性は32%→34%と上昇しているのに対し、女性は55%→46%と減少し、「男女の差が縮まった」ことがわかる。
- ③ 不適。「週の半分以上家族と朝食をとる人の割合」(■+□)は、平成28年の60歳以上については、男性(81%)の方が女性(73%)よりも高くなっている。
- ④ 不適。60歳以上の年代について、「ほとんど毎日家族と朝食をとる人の割合」をみると、女性は77%→69%と減少している。

問4 4 正解は①

- ① 適当。ステレオタイプとは、特定の現象や事象などについて、ある集団内で共有されている固定化されたイメージのこと。「男性」という性別だけでその人の性格や特徴を決めつけるのは、ステレオタイプの例。
- ② 不適。原因と結果を関連付けて考察している。
- ③ 不適。事実に基づいて推測している。
- ④ 不適。行動と発言に基づいて性格を分析している。

問5 5 正解は①

- ① 適当。女子差別撤廃条約は1979年に国連総会で採択され、日本も1985年に批准した。
- ② 不適。子ども(児童)の権利条約は1989年に国連総会で採択され、日本も1994年に批准した。
- ③ 不適。NPOは非営利の民間組織であり、「政府が主導する」わけではない。
- ④ 不適。従来の安全保障は、紛争の抑止や平和の維持を主な目的としていたが、「人間の安全保障」は、貧困や飢餓のほか、環境破壊や自然災害・テロといった人間の生存や尊厳を脅かす脅威から一人一人を守ることを目的としている。

問6 6 正解は①・②

- ① 不適。1960年の時点で核家族は過半数を占めており、大家族(拡大家族)が多かったというイメージはあるものの「一般的」とまではいえない。
- ② 不適。高度経済成長期に核家族が増加し、その割合は1975～80年頃にピークとなったが、その後は単独世帯の増加にともない、やや減少傾向にある。

CHECK 核家族とは、(1)夫婦のみ、(2)一組の夫婦と未婚の子、(3)ひとり親と未婚の子からなる家族のこと。

- ③ 適当。現在の日本では、結婚観も変化し、夫婦や家族の形態が多様化している。
- ④ 適当。パラサイトとは「寄生する」という意味で、学校卒業後も親と同居し、経

済的に親に依存している未婚者のことをパラサイト=シングルという。

問7 正解は④

- ①不適。実存主義の思想家ヤスパースは、人間は限界状況に直面することで自らの有限性を自覚すると考えた。
- ②不適。「生命への畏敬」はシュヴァイツァーの用語。
- ③不適。小林秀雄ではなく、丸山真男についての記述。
小林秀雄は日本の近代批評を確立した昭和期の評論家。
- ④適当。昭和期の小説家である坂口安吾は『墮落論』で、人間が本来の姿に戻ることを「墮落」と呼んだ。

問8 正解は②

- a. レヴィ=ストロースは構造主義を代表する思想家。構造主義は、「個人の意識や行為」の意味を、それらを規定する体系との関わりで理解しようとする。
 - b. フーコーは、西欧近代の歴史において、権力と知識が結びつき、人間の思考が無意識のうちに知の構造に支配されてきたことを指摘した。
- メルロ=ポンティは、現象学の立場から、身体を物体と意識の両義性をもつものとして捉える身体論を唱えた。

問9 正解は③

- ①不適。ロールズは正義感覚が成り立つ前提として愛を捉えているわけではない。
- ②不適。正義を行う対象は愛する者に限られるわけではない。
- ③適当。ロールズは、正義感覚が成り立つことを説明するために、私たちが真実として信じている愛を取り上げている。
- ④不適。「正義感覚をもつ人」が、あえて「害を受けることを欲し」「愛を失うことを求める」とは述べられていない。

問10 正解は③

- ①不適。Aは「何でも自己の自由、ではない」(6番目の発言)と述べていることから、「個人の自由を重視するA」という記述は適当ではない。Cは育児や介護を行う場として家族を捉えている(3・4番目の発言)が、「核家族でなければならない」という主張は見られない。
- ②不適。Bは家族のあり方を見直し、家族の中で「自由を尊重し合う関係を築いていくこと」(6番目の発言)を重視しているが、「家族そのものを否定することが必要」とまでは言っていない。

- ③**適当**。Aの6番目の発言とCの3・4番目の発言から、二人とも「家事や育児」を「家族の重要な役割」として捉えていることがわかる。一方、Bは「育児や介護」を「社会全体で支え合うべき」（4番目の発言）と考えている。
- ④**不適**。「血縁は関係ない」というCの2番目の発言から、前半のCに関する記述は不適。「重要なことは」「血縁関係ではない」というA・Bについての後半の説明は**適当**といえる。

第2問 やや易～標準 《古代思想における「癒し」とは》

問1 **11** 正解は②

- ①**不適**。プラトンは、「自然界の諸事物」はアイデアの影にすぎず、「**真実在**」はアイデア界にあるアイデアのみであるという**アイデア論**を唱えた。
- ②**適当**。アリストテレスは、すべてのものは可能態に潜む**形相（イイドス）**が引き出されて**現実態**へと成長すると考えた。
- ③**不適**。ストア派は、「自然を支配する**理法**」と「**人間理性**」は共通しているから、**理性に従って生きる**ことで宇宙と調和できると考えた。
- ④**不適**。ユダヤ教・キリスト教ともに、**唯一神による天地創造**が説かれる。

問2 **12** 正解は④

- ①**不適**。資料文5行目に「求められても、**致死薬**を与えることはせず」とある。
- ②**不適**。資料文6行目に「私の生活と**医術**とともに清浄かつ**敬虔**に守り通します」とある。
- ③**不適**。資料文3・4行目に、「養生治療を施すにあたっては……**患者の利益**になることを考え」とあるので、「その患者に**不利益**を与えることも許される」という内容は**不適**。
- ④**適当**。資料文の最終文の内容に照らして**適当**である。

問3 **13** 正解は②

朱子の**理気二元論**とは、「万物に内在する**理**」が「**物質的な気**」に宿って万物が成立しているという思想。「心のなかのみに存在する**理**」（①・③）、「**非物質的な気**」（①・④）という記述は誤り。よって、②が**適当**。

問4 **14** 正解は①

- ①**適当**。道家の**荘子**は、心を空虚にし「**心身を忘れて**」（**心齋坐忘**）、**無為**自然の道と一体化し、**自由な境地（逍遙遊）**を目指すことを説いた。

- ②不適。五常の内容は正しいが、これら5つを個人修養の基本的徳目としたのは、前漢の儒学者である董仲舒。
- ③不適。五蘊のうち、「身体における物質的な要素」を指すのは「色」のみである。
CHECK 五蘊とは、色（物質や肉体）・受（外界のものを感じる作用）・想（物事を思い描く表象作用）・行（物事を形づくる形成作用）・識（物事を対象として認識する作用）の5つの要素。仏教ではすべてのものは5つの要素が集まって成り立つと考えられた。
- ④不適。ブッダはそれ自体で成り立つ固定した実体はないという教え（諸法無我）を説いた。「心や身体が変わらないものであることを知る」という部分が誤り。

問5 15 正解は③

- ①不適。紀元前6世紀頃の古代インドでは、バラモン教の祭祀中心主義を批判する自由思想家たちが登場し、独自の教えを説いたが、輪廻はインドにおける普遍的な思想であり、ほとんどの思想家たちが輪廻との関わりのなかで思想を展開した。
- ②不適。パウロは、「神に背いたアダム」とその子孫である人間の罪（原罪）を贖うために、イエスは十字架刑に処せられたという贖罪の思想を説いた。
- ③適当。イスラーム教では、最後の審判で、生前の行いによって天国と地獄に振り分けられると考えられているので、信徒は現世でシャリーア（イスラーム法）に従って生活しようと努める。
- ④不適。墨家は、節用（浪費を慎む）とともに節葬（葬礼の廃止）を説いた。

問6 16 正解は①

- ①適当。安息日とは一切の労働を禁じられた日であるが、イエスは安息日に病人を癒す行いをする。それは、あえて律法を破る行いをすることで、律法にこめられた本来の意味を人々に気づかせようとしたのである。
- ②不適。「律法が神の意志そのものとは関係のないもの」とイエスが考えていたわけではない。神の律法が成就するためには、外面的な律法の遵守だけでなく、内面的な信仰が必要であると考えていた。
- ③・④不適。「安息日に関する律法を厳格に守り通す」が明らかな誤り。イエスは、表面的な律法の遵守を批判した。

問7 17 正解は③

- ①不適。クルアーン（コーラン）は、ムハンマドに下された神の言葉であり、「彼を取り巻く人々」には示されていない。
- ②不適。イスラームではイエスを預言者の一人として位置づけており、ムハンマド

も救世主ではなく、預言者とみなされている。

CHECK イスラーム教の六大預言者

アダム・ノア・アブラハム・モーセ・イエス・ムハンマド

③ 適当。「天使の存在を信じること」は六信の内容に含まれている。

CHECK 六信：アッラー・天使・聖典・預言者・来世・天命

④ 不適。イスラーム教はムハンマドの後継者の解釈の違いなどから分派した。多数派をスンナ派、少数派をシーア派という。

問 8 18 正解は④

慈悲とは、仏教で説かれる普遍的な愛のこと。

- ① 不適。慈悲の精神は「人間のみ」ではなく、すべての生き物（衆生）に注がれる。
- ② 不適。「親子や兄弟などの間に生まれる愛情を様々な人間関係に広げる」という愛は、儒教の開祖の孔子が説いたもの。
- ③ 不適。「慈悲の実践」は大乗仏教で重んじられたが、これは仏教の基本的精神であり、上座部仏教でも軽んじられることはない。
- ④ 適当。「慈」（マイトリー）とは、「他者に楽しみを与えること」（与楽）、「悲」（カルナー）とは「他者の苦しみを取り除くこと」（拔苦）を意味する。

問 9 19 正解は④

- ① 不適。人間が自然の諸事物を新しくつくり変えて病の原因をなくすことや、病によって人間関係が断たれるという内容は本文中に見られない。
- ② 不適。第3段落の最終文には「病の癒しは、慈しみにより他者との関係を結ぶことに通じていた」とあるので、「他者に依存した状態から自己を解放」することを目指すという選択肢の記述は、相互依存の関係を否定的に捉える点で誤り。
- ③ 不適。病の癒しとは「超越的存在との絆の回復を目指すこと」ではなく、信者や隣人など「他者とのつながりを考える手がかり」（第3段落）とある。
- ④ 適当。選択肢の前半は第2段落、後半は第3段落の内容に相当する。

第3問 標準～やや難 《心と行為の関係について》

問 1 20 正解は⑤

ア. 誤。古代の日本人にとって神とは畏れ敬うものであり、「道理によって神を理解しようとする」態度は見られなかった。「真心」とは、理屈でものごとを捉えようとはしない、生まれながらの素直な心のこと。江戸時代の国学者である本居宣長は、「真心」に従って生きることが古道にかなう生き方であると説いた。

- イ. 正。古代日本で重んじられた清明心の説明として正しい。
- ウ. 誤。古代の日本人にとって神とは「善悪の基準」を示す存在ではなく、災害や豊穡など共同体にとっての利益と不利益をともにもたらす存在であった。「正直」は、古代では清明心と同義であったが、時代を下るにつれ偽りや私欲のない純粋な心を指すようになった。江戸時代に町人道徳を説いた石田梅岩は、これを商人の重要な徳目とした。

問2 [21] 正解は③

- ①不適。「東大寺に戒壇を設立して、僧を育成するための受戒制度を確立した」のは渡来僧の鑑真。
- ②不適。『立正安国論』を著したのは日蓮。それ以外の一遍の記述は正しい。
- ③適当。栄西は入宋して臨済宗を学び、日本臨済宗の開祖となった。戒律を重視し、禅の修行が鎮護国家に役立つことを『興禅護国論』で説いた。
- ④不適。「南無妙法蓮華経」を「南無阿弥陀仏」にすれば正しい内容となる。

問3 [22] 正解は②

- a. この世は絶えず移りかわるという仏教の世界観を無常観という。日本では、この世のはかなさを感じ取る「無常感」として理解された。
浄土とは悟りを完成した仏の国土のこと。
- b. 「武士道と云は、死ぬことと見つけたり」は、主君への献身を説いた山本常朝の著作『葉隠』のことば。
『自然真営道』は、封建社会を批判した安藤昌益の著作。
『翁問答』は、万物の根本原理として「孝」の徳を説いた中江藤樹の著作。

問4 [23] 正解は④

- ①・②・③適当。日本人の美意識の説明として正しい。
- ④不適。「いき(粋)」とは、さっぱりして洗練された、近世の美意識のこと。

問5 [24] 正解は①

- 「主君の心に偽りが無い→正しい行動として表れる→周囲は恥じ畏れて自然に主君に従う」という内容は、孔子の徳治主義の教えを汲んだもの。
- ①適当。資料文2・3文目の記述を言い換えた内容となっている。
- ②不適。「主君が口で正しいことを命令」しても、主君の行動が正しくなければ、周囲は「従うふりをする」だけだと資料文最終文にある。
- ③不適。「主君の心に偽りがあっても、その命令を守ろうとする」という選択肢の

記述は、資料文最終文の記述と照らして誤りとなる。

- ④不適。「主君の心が真実」であれば、「正しい行動として外に表れる」と資料文2文目にある。

問6 [25] 正解は②

- ①不適。復古神道は江戸時代の国学者の平田篤胤が提唱した。
 ②適当。長州藩の吉田松陰は、幕府に失望し、すべての民が一君(天皇)に忠誠を尽くすべきという一君万民論を説いた。彼の独自の尊王攘夷論は討幕運動に大きな影響を与えた。
 ③・④不適。会沢正志斎は水戸学の代表的学者。水戸学は尊王攘夷の立場であり、公武合体論や開国論には反対であった。公武合体論・開国論を説いた洋学者に佐久間象山がいる。

CHECK 水戸学はもともと水戸藩の『大日本史』の編纂を機に興った学問であるが、幕末になると、藤田東湖・会沢正志斎らが大義名分論や尊王論を主張した。

問7 [26] 正解は④

- ①不適。『代表的日本人』を著したのは内村鑑三。彼は、日本の武士道精神はキリスト教が根付く土台となると考えた。

CHECK 『代表的日本人』は、西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人を海外で紹介するために英文で書かれた。

新島襄は同志社を設立し、キリスト教に基づく教育を行った明治のキリスト者・教育者。

- ②不適。脱亜論を説いたのは福沢諭吉。
 ③不適。『武士道』を著したのは新渡戸稲造。

CHECK 新渡戸稲造は札幌農学校でキリスト教に入信し、大学の教授・学長などを歴任した。「人格」の大切さを強調し、人はみな平等であり、すべての人に教育を受ける権利があると考えて、キリスト教に基づく教育に尽力した。

植村正久は、東京神学社を設立し、伝道者の育成にあたるなど、プロテスタント教会の指導的役割を果たした。

- ④適当。日露戦争に際し、非戦論を展開したことで知られる内村鑑三であるが、日清戦争ではこれを義戦であるとして支持した。

問8 [27] 正解は①

- ①適当、②・③・④不適。西田幾多郎は、主観と客観を対立的に捉える西洋の二元的思考を批判し(②・④不適)、主観と客観が区別されない主客未分の経験(純粹経験)こそが根本的な経験(唯一の实在)であると主張した。さらに、一切の

ものを存在させる絶対的な無の場所(絶対無)の論理を展開する。例えば、私たちの人格は、自分と矛盾する他者の人格を認めることによって成立する。西田が、矛盾や対立を認めながら、それらを統一する力を重視したことを理解できれば、「矛盾も対立も存在しない」という③・④の記述は不適と判断できる。

問9 28 正解は③

- ①不適。「礼に従って行為することで心を制するべきだと説いた」のは、朱子学者ではなく、朱子学を批判した荻生徂徠である(第3段落)。
- ②不適。道元は、坐禅を「悟りという目的に至る手段」ではなく、「坐禅の修行そのもの」が悟りであると捉えていた(第2段落)。道元・キリスト者とも、心のあり方を表す行為を重視している。
- ③適当。中世の武士たちについては第2段落、幕末の志士たちについては第3段落の記述と合致する。両者とも、心と行為との関わりを重視している。
- ④不適。「心の分析を行う学問」によって徳行を実践することを提唱したのは、荻生徂徠ではなく朱子学者である(第3段落)。

第4問 標準 《運命についての考え方》

問1 29 正解は②

- ①不適。プラトンが『国家』で説いた理想国家の内容。
- ②適当。マキャヴェリは『君主論』で、君主は国家統治のために、ライオンのような「強さ」と狐のような「賢さ」をもたなければならないと説いた。
- ③不適。王権は神から授けられたとする王権神授説は、イギリスのフィルマーやフランスのボシュエらによって説かれた。
- ④不適。ホッブズが『リヴァイアサン』で説いた社会契約説の内容。

問2 30 正解は④

イドラとはラテン語で「偶像・幻影」の意味。ベーコンは、人間が物事を判断する際に誤りに陥る原因となる偏見や先入観をイドラと呼んだ。アは市場のイドラ、イは洞窟のイドラの説明である。

種族のイドラとは、人間という種族に共通する偏見、感覚の錯覚など。

劇場のイドラとは、伝統的な権威を盲信することから生じる偏見。

問3 31 正解は⑥

- a. ロックは「感覚的な経験によって」観念が与えられる以前の、生まれつきの人

間の心を白紙（タブラ=ラサ）と呼んだ。

繊細の精神はバスカルの用語で、心の動きを直感する精神のこと。

- b. ライブニッツが、あらゆる事物を構成する分割不可能な実体をモナドと呼んだという知識があれば『モナドロジー（単子論）』とわかる。

『省察』はデカルトの著作、『エチカ』はスピノザの著作。

問4 [32] 正解は②

- ①・③不適。ヘーゲルは、法と道徳を統合した人倫において、真の自由が実現すると考えた。①は「道徳」と「法」を入れ替える、③は「人倫」と「法」を入れ替えると正しい内容になる。
- ②適当。ヘーゲルの歴史観は、自由を本質とする絶対精神が人間を操りながら自己を展開する過程である、というもの。
- ④不適。「国家同士を争わせ……対立状態を保ち続ける」という記述が誤り。

問5 [33] 正解は④

ニーチェの運命愛とはどういうものかを、九鬼周造の文章から読み取る問題。他の事柄でもあり得たはずの事柄が自分の人生にとって大きな意味をもつとき、なぜ、それでなければならなかったのか、自分に問いかけ、それを運命として受け入れることで、自分の人生を愛することができる。「意志が引き返して意志する」ということの意味を読み取ることがポイント。

- ①不適。「運命」は「取るに足りない偶然の出来事のこと」ではなく、「偶然な事柄であってそれが人間の生存にとって非常に大きい意味をもっている場合」のこと（資料文2文目）。
- ②不適。「運命」を「起こることも起こらないこともあり得たのだと考える」のではなく、「自分がそれを自由に選んだ」（資料文最終文）と考えることで自らを救うことができる。
- ③不適。資料文は、自己の運命を愛して運命と一体になるための道を述べたものであるので、選択肢の後半の記述は誤り。
- ④適当。「意志が引き返して意志する」ということが自らを救う道である」とあり（資料文3文目）、それは、偶然に起こった出来事を、自分が自由に選んだこととして捉えることである（資料文最終文）。

問6 [34] 正解は④

- ①・②・③適当。サルトルによれば、人間は、「いかなる状況においても変化しない、同一の本質をそなえた事物とは異なり、まずこの世に存在し、その後で自

らの自由な選択によって自己の本質を定義していく存在である(②)。しかし自由には責任が伴うため、人間は自由であることに不安を感じる(③)。自己のあり方を選ぶことは、他者や社会にも影響を与えるため、その責任は全人類にも及ぶが、人間は、自己を社会に投げ込むこと(社会参加、アンガージュマン)によって「現実を新たにつくりかえていく可能性に開かれている」ともいえる(①)。

- ④不適。「あらかじめ自らの本質が定められて」いるのは人間ではなく事物である。人間の実存を定義した「実存は本質に先立つ」という言葉の理解を問う選択肢。

問7 35 正解は①

- ①適当・②不適。ダーウィンは、突然変異によって環境に適応できる有利な変異を起こしたものが生き残ると考えたので、②「固有の祖先から変化することはなく」という記述は誤り。
- ③・④不適。スペンサーは、社会は「適者生存のメカニズムを通じて」軍事型社会から産業型社会へと進化しており、それを「国家が人為的に統制すること」はしてはならないという自由放任主義を主張した。

問8 36 正解は①

運命に対し、第2段落で「やむなき運命に抗う立場」、第3段落で「運命を最善とみなす立場」、第4段落で「運命を自らのものとして引き受ける立場」について述べられている。

- ①適当。前者は第2段落の記述に、後者は第4段落の記述に相当する。
- ②不適。前者(第3段落)はこの世を信頼しており、後者(第4段落)は自分に降りかかった人生を引き受けているので、自分の人生を「不運」と捉えて「解決される」ことを期待する態度はともに見られない。
- ③不適。後者(第3段落)は、「いかなる出来事も善き運命のもとにあるとして肯定する」立場であるので、「悪しき出来事も」「最善の運命へと変え得る」とは考えない。
- ④不適。予想外に展開する私たちの人生に示唆を与えてくれるものとして、先人たちの思想が紹介されており、「運命の行く末全体はあらかじめ見通せるという信念」については述べられていない。